

空中回廊

第6号

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

愛知県美術館友の会　会報

1 私のこの1点 所蔵作品から
2 私のこの1点 川合玉堂展から
3 美術館のページ ピエール・ボナール《にぎやかな風景》
4 事務局から

AICHI ARTS CENTER

私のこの1点

愛知県美術館の所蔵作品から

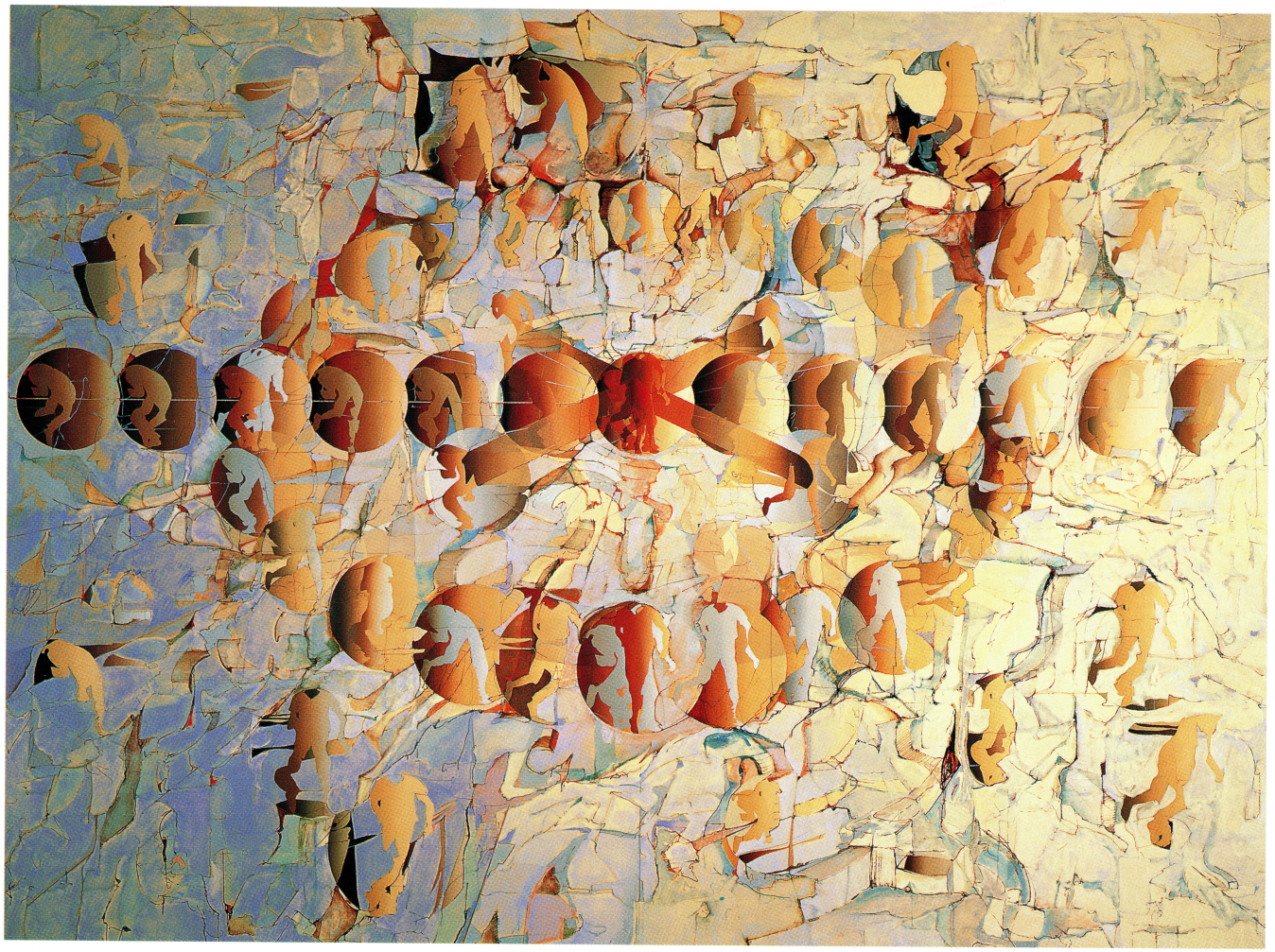
愛知県美術館の所蔵作品のなかから、会員の皆さんに「私のこの１点」というテーマで、好きな作品、気になる作品を取り上げ、ご紹介いただきます。

宇佐美 圭司《ビッグ・バン》

石橋 五郎

絵の前に立って、画像を見ようと目を向けるに、画像らしきものが目に入ってこない。じっと見る…。洋画でもなく、日本画でもなさそうだ。そのとき、ふっと頭に浮かんだのが大観のことば「作家はどこまでも創造して行くことが貴いので、人の真似はいけません。自分の今日の作品と、明日のそれとは変わっていてもよいのです。またその変化のない人は駄目です。(「創造の世界」の一節)」

この言葉を思い出しながら、再度画面をじっと見つめていると、自分の心の動きが感じられてきた。大自然のなかにおける生命の誕生…等、多様な創造が生まれそうだ。美術とは、色のトリックといわれるが、この絵はまさに色と影のトリックであり、大正生まれの私にとっては興味深く、かつ気になる作品である。



宇佐美 圭司(1940–)《ビッグ・バン》1987年　218.2×290.9cm



サム・フランシス(1923–1994)《消失にむかう地点の青》1958年　182.8×238.7cm

サム・フランシス
《消失にむかう地点の青》

岩田 真美

白いカンバスに押しつけられ、飛び散り流れる絵具たち。この絵の激しさに、初めて息をのんでしまいました。

本来ならば冷静であるはずの青が、乱舞し、青の動きをコントロールしているかの様に置かれたオレンジ色。見入っているうちに訪れる静寂と不思議な安堵感。

やはり青の持つ効果か、柑橘類を思わせるオレンジの効果か、色のマジックにたっぷりと魅了させられてしまいました。

何度も絵に会いたくなる私の大切な一枚です。

安井 曽太郎（1888−1955）《承徳喇嘛廟》1938年　60.0×77.5cm



安井 曽太郎《承徳喇嘛廟》

村島 照代

安井曽太郎という名前を意識した作品との出会いは《承徳喇嘛廟》が初めてである。

以前、薔薇の絵を見た事があるが、あまり印象に残ってはいない。梅原龍三郎と並ぶ著名な洋画家であるという事以外、恥ずかしながらこの作品についても、作家についても、殆ど知識がなく、ただこの色鮮やかな明快な風景が気に入って、足を止めてしまうのである。初めて見た時は、あの凛としたポタラ宮を思い出した。澄んだ空を流れていく白い雲。この聖地へ「ようこそ」とお辞儀でもしているような陰影のはっきりした木々。その向こう、空の高みに向かって背伸びしているかのような、ひときわ鮮やかな廟、この風景は鮮明というだけではなく私の中で伸びやかに動いている。私の気分もとても伸びやかになる。風の音、木々のざわめきに混じって、心地よい天空の調べが微かに聞こえてくるような気さえする。この一枚の絵の向こうにはどんな安井芸術があるのだろうか。楽しみが増えた。

河野 友子

以前、安井曽太郎の素描展を旧愛知県美術館で観て、その素晴らしさに魅せられました。この絵は藤島武二と河北省の承徳に遊んだ時に描いたものと云うことです。青空に浮かぶ白い雲、緑の大地、丘の上に屹立する淡紅色のラマ教の寺院が鮮やかな印象を残します。この絵の描かれた季節は夏ではないでしょうか。大陸を渡るさわやかな風を感じる絵で、観る度に新しい感動を覚えます。



エルンスト・バルラッハ《忘　我》

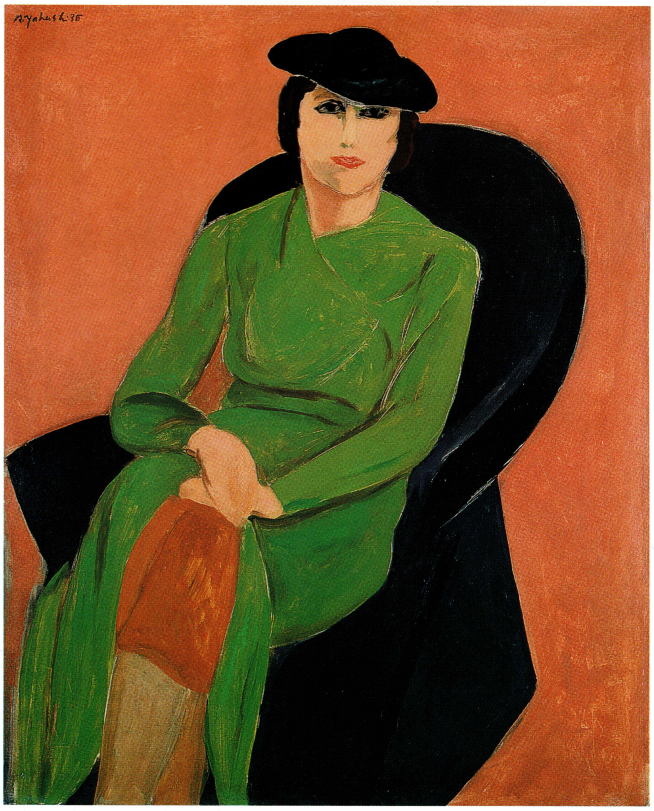
藤本 逸子

バルラッハに最初に出会ったのは、静岡県立美術館でした。《読書》という、修道士らしき二人の男の人が静かに本を読んでいる、穏やかな、ほのぼのとした温かい作品です。

愛知県美術館で「忘我」を見たとき、びっくりしました。あまりにも激しいのです。しかし、よく見ると、バルラッハ特有の温かさがあります。「どうしたの？　人生には、いろんなことあるよ。まあまあ、そんなに怒らないで。」と、頭を撫でて宥めてやりたくなります。偉そうにも、私が、お釈迦様か、観音様になったような気分になってしまうのです。50cm足らずという作品の小ささのせいかも知れません。

本当は、そう言って宥めてほしいのは、私自身です。実に、人生には、いろいろなことがありますから。私は《忘我》に話しかけることによって、おそらく、自分自身を宥めているのでしょう。

エルンスト・バルラッハ（1870−1938）
《忘我》1911−12年　46.0×31.3×15.0cm



矢橋六郎（1905−1988）
《女の肖像》1936年
99.5×80.4cm

矢橋 六郎《女の肖像》

浅井 三千子

私はここ十数年なぜか自画像、肖像画、人物の集合画に関心が深まるばかりです。それはフランス絵画の写実的な光彩の美に始まり、今では装飾的な絵画より生々しくどろどろとした人間性を感じる方が好きになってしまいました。そこには何時も生と、美、人との出会いを感じるからです。

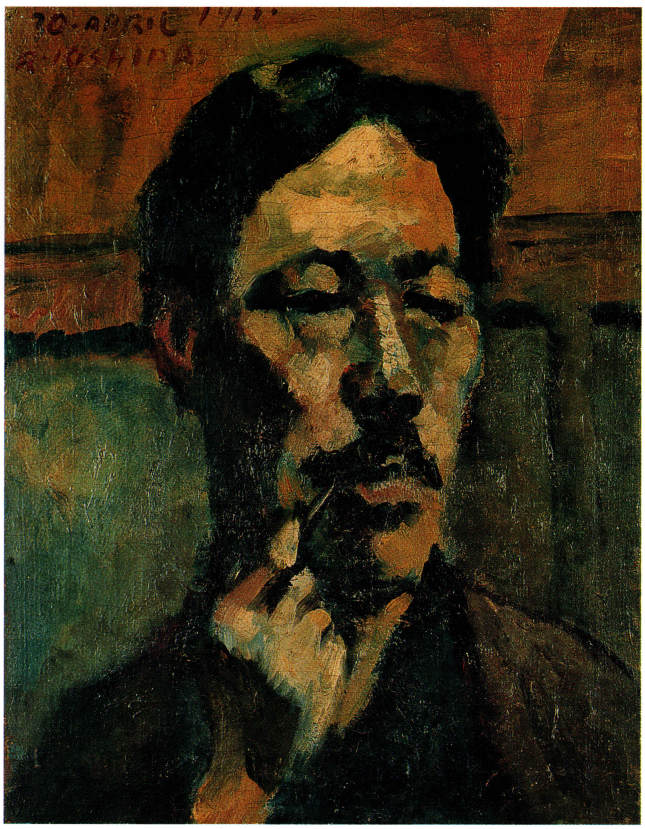
或る日私は展示室で気になる女性と出会いました。はっとしてセンスの良さにうーんと言ってしまいました。粋で上品なムードの彼女に見とれてしまいました。緑色のドレス、モダンな黒の帽子と椅子、この作品は個性的な配色なのに、柔らかな静けさを見る度に感じます。背景の色彩も効果的ですが、ポイントは彼女にあり、ですね。黒い大きな瞳とポーズ、少し緊張した眼差しと微かなほほ笑み、引き締まった肌から彼女の感性の豊かさが伝わってきます。同性から見ても魅力的な気になる女性ですね。「画家とモデル」「構成と感性」との相一体を作品から感じます。

岸田 劉生《斎藤与里氏像》

鬼頭 勝之

小生のここ数年研究している徳川宗春は、吉宗の名君評価と逆に迷君で評価が定着している様であるが、時代と人（作品）との関係を考える時、このことは絵画史にも通じる側面がある様に思われる。宗春の著『温知政要』は、発禁の後、男女平等・四民平等を唱える富士講の聖典として読みつがれ、明治四年「穢多非人等の称廃止令」が出された時、富士講の指導者の一人は、「宗春候の御志今成る」と記した。後世への人（作品）の力とはこういうものではないか。確かに吉宗の著『紀州政事草』は大きな影響を与え、名君像は確立されたが、だれも本質的な影響をうけず忘れ去られた。

劉生の作品を見る度に、高校の頃から好きだった彼の作品には、原点での自己との対話があり、流行以前の芸術のあり方を考えさせてくれる気がするのである。



岸田劉生（1891−1929）《斎藤与里氏像》1913年　53.0×41.0cm

フランティシェク・クプカ《灰色と金色の展開》

都築 恵美子

抽象画は訳がわからなくて…。そんな思いがあって通り過ぎることが多かったのだが、この絵については何度も振り返ったり、戻ってみることになった。

もともとグレイの色が好きで、いろいろな色と反応しあって微妙な変化をみせる色だと思っているが、この作品では暗いグレイの線や量の動きによって奥へ引き込まれてゆく。この形は何を表しているのだろうか。金色へもグレイの動きで輝く女たちが見える気がするし、子供たちが見えたりもする。気にかかる絵である。

何年か前にクプカ展があったことを思い出したが、あのときはまだ何も知らなくて見る機会を持たなかった。今とても残念に思っている。



フランティシェク・クプカ（1871－1957）《灰色と金色の展開》1919年　60.0×81.0cm

川合玉堂（1873－1957）《彩雨》1940年　88.0×117.0cm　東京国立近代美術館蔵

川合玉堂展から

青柴 光男

数多くある名作の中から“この一点”といわれると本当に迷ってしまう。好きな作品が多くあり過ぎるから。それでも一点といわれると私は川合玉堂の《彩雨》が特に好きだ。

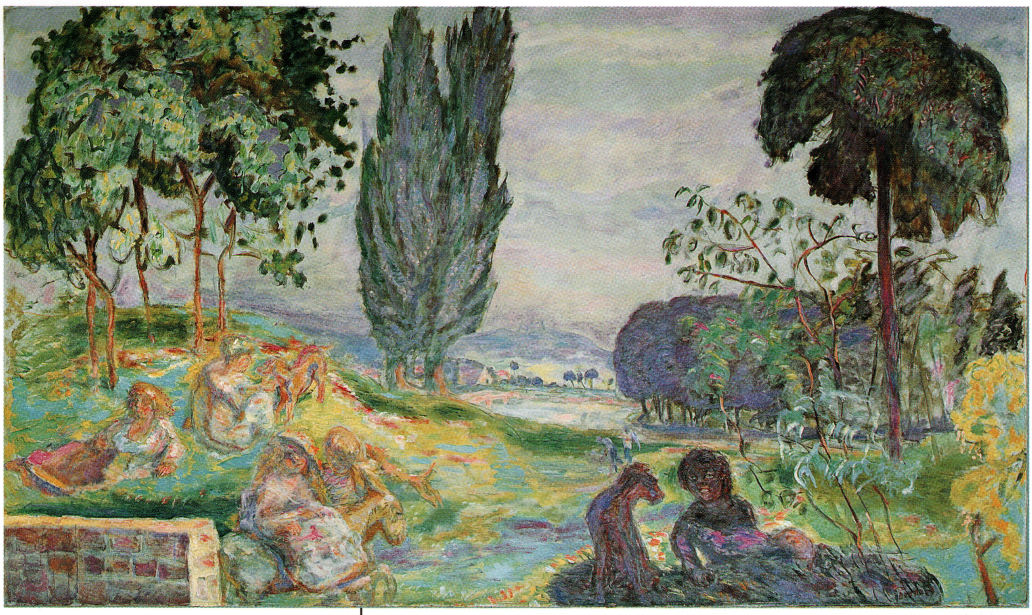
玉堂の絵は色彩の使い方が本当に美しい。そして自然だ。この彩雨も、かつては田舎へ行けば多く見られた水車と、わらぶきの農家（或いは水車小屋か）と、竹樋を伝って流れ落ちる水、そしてその背後の背高く聳える黄葉した大木、霧雨に煙る画面、これを《彩雨》と名付けたのも如何にも玉堂らしい。じっと見つめていると心が自然に落ち着いて来て、いつまでも去り難い思いです。名作中の名作と思います。



本年三月には代表作110点に及ぶ作品で川合玉堂展が開かれるのを非常に楽しみにしています。

川合玉堂展　3月20日－5月5日

ピエール・ボナール
1867－1947
《にぎやかな風景》
1913年頃



「女性は美しくなる権利がある」

「世界に名を馳せる化粧品ブランド」ヘレナ・ルビンスタインのホームページは、このようにして始まります。

1870年にポーランドで生まれたヘレナ・ルビンスタインは、ご承知のとおり、オーストラリアに渡って化粧品ビジネスで成功し、ヨーロッパ、アメリカ、日本へとその活動を広げた人物です。ところでこの人物は、宝石、家具、メキシコやアフリカの彫刻、あるいは西洋の近現代美術のコレクターとしても知られています。例えば横浜美術館にあるダリの《幻想的風景》(1942)は、ルビンスタインの私邸に飾られていたものです。

さて、本年度の新収蔵作品の核となるボナールの《にぎやかな風景》の制作をこの画家に依頼し、生涯自分の手元においていたのもルビンスタインでした。この作品は昨年当館で開催したボナール展に出品されましたから、ご覧になった方も多いと思います。

彼女の自宅に秘蔵されていたこの作品は、長い間人の目に触れることはありませんでした。そして1965年、彼女の没後に行われたコレクションの売り立てで広く知られるようになりました。スイスの画廊の所有となったこの作品は、1973年に日本で行われ、名古屋では丸栄で開かれたボナール展に出品されていましたが、今となってはそのご記憶がある方はほとんどいらっしゃらないでしょう。その後1980年代半ば過ぎにパリの画廊に移り、そして日本の所蔵家の所有となりました。

この作品が日本にあることを知ったのは数年前、ボナール展の準備中のことでした。この作品のような大型の装飾画は、1910年前後にボナールの支援者となった新興市民階級の人たちによって注文され、何点か制作されていますが、こうした大型の作品を海外の美術館から借りることは保存上の問題もあってきわめて困難ですので、国内からの出品が可能になったことは準備中の担当者を大いに力づけてくれました。それと同時に、こうした作品がコレクションに加わったらどんなによいことかとも思ったものでした。

《にぎやかな風景》は、セーヌ河畔の近隣に住んでいた27歳年上の先輩画家モネの晩年の仕事を吸収して、独自の世界へ高めようとした頃の作品です。このジヴェルニーの画家モネの睡蓮をはじめとする晩年の仕事は、遠く抽象表現主義を予告するなど20世紀絵画にとっても重要ですが、ボナールのある種の作品に存するサム・フランシスやモーリス・ルイスと通じる側面も近年注目されています。われわれの日常の両目の動きや働きに注意を払い続けたボナールは、その作品の親しみやすい外見にもかかわらず、時代を先取りする革新性を持っていたのです。その意味でもこの作品が所蔵品に加わる意義は大きいでしょうし、バブル崩壊後の美術品の海外への流出を食い止めこうした名作を入手できたことは思いがけない幸運ということができます。

栗田秀法(愛知県美術館 学芸員)

事務局から

98年度の企画展

新年度の企画展が決まりました。ゴーギャンの《黄色いキリスト》やマティスの《音楽》などの名作で知られるアメリカのオルブライト＝ノックス美術館の選りすぐりの名品による展覧会をはじめ、佐伯祐三や松本竣介の回顧展など、内容の充実した魅力的な企画展をご覧いただけます。

■川合玉堂 展　3月20日（金）～5月5日（火）

愛知県の木曽川町に生まれた日本画家、川合玉堂（1873－1957）は、水墨と色彩の融和した情緒あふれる近代的な風景画を生み出しました。代表的な作品約110点により、60余年にわたる彼の画業を紹介します。
〔一部作品の展示替えがあります〕

■久野真・庄司達 展　－鉄の絵画と布の彫刻－　5月15日（金）～6月7日（日）

名古屋を拠点に活躍する二人の造形作家、久野真（1921年生まれ）と庄司達（1939年生まれ）の展覧会。久野は鋼鉄や鉛を用いたレリーフ、庄司は大きな布を空間に設置するインスタレーションに取り組んでいます。新たな空間創造をめざす両者の個性を対比します。

■オルブライト＝ノックス美術館展　名画への誘い
6月19日（金）－8月2日（日）

アメリカ有数のコレクションとして知られるオルブライト＝ノックス美術館の所蔵品から選び抜かれた、ミレー、モネ、ルノワール、ファン・ゴッホ、スーラ、ピカソ、マティス、モディリアーニなど48作家の油彩画62点により、ヨーロッパ近代絵画の流れをたどります。

■生誕100年記念　佐伯祐三 展　8月16日（日）－9月27日（日）

1920年代にフランスに渡り、内面からほとばしる激情を荒々しい筆線の動きに託しながらパリの街角を描き、30歳の若さで燃えつきるように生涯を閉じた佐伯祐三（1898－1928）は、日本の近代絵画史に鮮やかな足跡を残しました。生誕100年を記念して、彼の芸術を約100点の代表的な油彩画によってふりかえります。

■アルトゥング 展　10月9日（金）－12月13日（日）

ドイツに生まれフランスで活動したアンス・アルトゥング（1904－1989）は、1920年代から抽象絵画を試み、第二次世界大戦後は「熱い抽象」を代表する画家として国際的な名声を築きました。油彩画、素描、写真など約140点により、70年間の制作活動の全貌をたどる、世界で初めての本格的な回顧展です。

■没後50年　松本竣介 展　1999年1月8日（金）－2月21日（日）

日中戦争から太平洋戦争にいたる時代の動きを冷静に見つめながら、みずみずしく抒情的な都市風景や人物像を描き、戦後間もなく36歳で世を去った松本竣介（1912－1948）の作品は、今日もなお多くの愛好者を引きつけています。没後50年を機に、油彩画約90点、素描約30点により彼の詩情豊かな芸術を紹介します。

■プッサンとラファエッロ　－借用と創造の秘密－　3月5日（金）－4月11日（日）

フランス17世紀の画家ニコラ・プッサン（1594－1665）はルネサンスの巨匠ラファエッロなどの著名な作品を写した「翻刻版画」を創造の源泉としていました。この展覧会では、パリ国立図書館の所蔵作品を中心とする近世ヨーロッパ版画約100点により、プッサンが過去の巨匠から何を学び、独自の創造に高めたかを探ります。

もっと楽しい会報に！
ご感想ご意見をお寄せください。

編集
会　員：宮崎玲子、天野明、北川昌子、白尾淑子、杉山博之、
　　中島敬子
事務局：村田真宏、小笠原敦子

発　行：1998年2月
　　愛知県美術館友の会　〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
　　TEL 052-971-5511(代)　FAX 052-971-5604

デザイン・レイアウト：小谷恭二



宇佐美圭司（1940－）《ビッグ・バン》1987年・（部分）